

私は酒、たばこ、コーヒ、ギャブルはやらない。理由は至って簡単だ。酒は20歳になったら誰でも飲めるものだ！なんて勝手に思い込んでいた（良い子は真似しないでくださいね）。そんな若気の至りでボトル半分くらいを約1時間で飲んでしまったことがある。

やったこともないのに、意気込んで通はストリートだ！とテレビのCMを信じたのがバカだった。「ほー、ウイスキーはこんな味なんだ」と感動するも15分もしないで体が熱くなり頭がクラクラ状態に陥り、意識を失い2日間寝込んでしまった。あれ以来お酒がおいしいと思う勘違いは自分の記憶から消滅した。ただ、全く口にしない訳ではない。

酒は人と農作物が交わってできた神からのギフト

お酒は百薬の長といわれるし、年を重ねると味覚が変わると聞いたので、意味のないチャレンジを年に一度くらいやる。しかしビールを口にするとやはり「あゝ苦っ！」というも記憶の味覚が蘇る。よくこんなマズいものにお金を出して飲む気になるな〜と考えてしまう。本来苦いものは体に良い訳がないので、太古の昔に経験したDNAの記憶が舌を通して危険を教

えてくれるのだ（と信じている）。

ただ記憶をたどれば20歳くらいの時に、1800円の大枚を払って買ったドイツの白ワインをグラスで一杯くらい飲んで、「これがヨーロッパの味か、なんか良いな〜」と感じてしまったことがあった。

後から調べてみるとポトルは茶色だった。その特徴はライン川流域で作られているものだ。甘口だったのか、辛口だったのかは覚えていないが、奥行きがありマツタリした味わいに感動したが、所詮アルコールは体が受け付けないので飲んでも数年に一度くらいで、グラスに2杯飲むと寝込んでしまう。

経験したことはないがライン川下りをする両岸にお城があり、今日では王様亡き後は観光名所になっているそうだ。なんでもドイツのワインは大昔ローマ軍が…野生のブドウで…ゲルマン民族大移動で…アブラムシで全滅の危機があり…世界に名だたるワインが誕生した。などと歴史に思いを馳せながら飲む

私を酔わせてどうするの？

Vol.118



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

のもよし、酔っぱらうために飲むのもよしといったところだろうか。

そういえば毎冬になると父が解体された豚を半頭買って来ていた。小学生だった私は今日も豚肉か〜と思いつつ、違う味覚を探していた。ある時、テレビの放送で肉にビールを漬けると美味しくなると言っていた。ビールはなかったの

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

